

茂原市社会福祉協議会長賞

京都府／51歳／女性／会社員

やの みき

矢野 実紀様

✉手紙の相手：娘

その日はいつもの朝のように玄関で貴女を見送った後、ちよつと診てもらっただけのつもりがそのまま緊急入院。次から次へと検査を受けながらも頭の中は状況に追い付けず、フリーズしたパソコン画面みたいにグルグル。着替えも何も無いなあとぼんやり考えながらぼつんぼつんと落ちる点滴のカタチを見上げていると貴女から「明日。荷物届けるから」とLINE。面会制限で託けられた大きな荷物を開けると、中には用途別に丁寧に纏められた解説付きの手提げがいっぱい。その一番上には貴女からの短い手紙一枚一枚読みながらぼろぼろ涙が止まらなかった。きつと夜遅くまでかかったよね。一生懸命調べながら用意してくれて、ひとつひとつメッセージを書いてくれて、お守りまで作ってくれたんだね。眠れなかったでしょう。突然の事に驚いただろうし、病状もわからず不安だったよね。気丈に気を張って頑張ってくれたんだね。いつもは「家のどこに何があるかわかる?」と聞くと「大丈夫。私、

やる時はやるんで」と悪戯っぽく笑いながら言うから、ついつられて笑ってしまうけど、ちよつと心配だった。ごめんね。「やる時はやる」貴女の言う通りでした。そして「なんとかする。お母さんはお母さんの事だけ心配して。ちゃんと治して。できるだけ早く帰ってきて」と書かれた手紙。その短い言葉の中に貴女の強さ、優しさ、不安、心細さ、色々な思いが痛い程に詰まっていて、何よりも大事に守らなくてはと頑張る支えになりました。身長はとくに抜かれているけれど、心も大きくなったね。強くなったね。優しくなったね。退院してからも何気なく手を添えてくれるし、「疲れたから休みたい」と私の体調を察し、先回りして気遣ってくれる。支えてるつもりが支えてもらってるんだね。ありがとう。これからも貴女が見せてくれる新しい世界の景色や、そこで輝く貴女の一瞬一瞬を見逃さないようにしていくね。よろしくお願いします。

≫手紙への想い≫

「ありがとう」の5文字だけでは、足りないほどの「ありがとう」を消えることのない見える言葉にして、想いを伝えることができたいと思います。